

「主の用なり」

マルコによる福音書 11 章 1 - 11 節

森島 牧人 牧師

今日与えられた御言葉の中に「子ろば」が出てきます。ろばは馬などに比べると見栄えのしない姿で、印象としては<優しく><柔和>、そしてどこか物寂しく<愚鈍>な感じもします。馬は戦場でも用いられて勇ましい働きをしますが、ろばが用いられるのは専ら<雑用>で、人間の日常生活の中の雑用のために生きている動物と言えるかも知れません。

今日の聖書は、主イエスのエルサレム入城の場面で、エルサレムを目の前にされた主が、二人の弟子に「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい。もし、だれかが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」(マルコ 11:2-3)と言われます。二人が村へ行くと、そこには主の言葉通りに子ろばがいて、主イエスは二人が連れて来たその子ろばに乗って、門を潜られたと聖書は続いています。主のエルサレム入城は、凱旋将軍のような堂々としたものではなく、雑用に使われるろば、それも子ろばに乗ってのみすぼらしいものだったのです。

この箇所を読む時、私は、神の命を受け、息子イサクを連れてモリヤの地へ行ったアブラハムのことを思います。年老いて授かった独り子イサクを、焼き尽くす献げ物としてささげよとの余りにも理不尽な神の命、イサクをろばに乗せて山を上る彼にとって、その三日間はどれほど長いものだったでしょう。しかし、彼がイサクを屠ろうとしたその時、天使の「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが今、分かったからだ。」という声がして、彼が目を凝らすと、そこには角をとられた雄羊が備えられていたのです。このあと、彼がその場所を「ヤーウエ・イルエ（主は備えてくださる）」と名付けたこと、神が彼に様々な祝福の約束をされたことが書き記されています。アブラハム命名の「ヤーウエ・イルエ」は、今のエルサレムの近くであると言われていました。

このアブラハムのことを思いつつ、主のエルサレム入城を見る時、アブラハムに代わって、ここでは神自らが、死に渡すために独り子を子ろばに乗せてゴルゴタの丘の見えるエルサレムへ送り出されたのだということに気付かされます。パウロが言っているように、アブラハムは神を信じたことによって義と認められたのですが、ここでは神が主イエスに於いて、神自らの義を人間に示そうとされているのです。聖書は、ここに福音があると語ります。それは、私たちが神を信じているのではなく、神が私たちが信じている。私たちが主イエスを信じて救われるのではなく、主イエスが私たちが信じるが故に私たちは救われるということです。

主の入城の際に、「主の用なり」と命ぜられたのは立派な馬でも牛でもなく、主を乗せるために取っておかれた小さな子ろばでした。役目を了えた子ろばは、主を乗せたことでの箔も肩書もなく、今までと同じ日常の中に戻されます。日常生活そのままに、「主の用なり」と言っていただき、そのまま元に戻されるこの子ろばの姿は、私たち信徒の日常の在り方を示していると思われるのです。

ザカリヤの預言通り子ろばに乗り、群衆の歓呼の声に迎えられた主イエスのエルサレム入城。しかし、人々と主の心は遠く離れていて、このあとの主イエスの出来事を知っている者は誰もいなかったのです。子ろばのみが重さとしてそれを知っていたのだったかも知れません。私たちの日常の中を歩いて行かれる主、その主の道の中に、私たちの救いはあったと、聖書は語っているのです。

(説教要約 羽入田悦子)